

結婚を経て名作を世に送り続けた

三浦綾子物語（2）



大正11年に、堀田家の第五子として、北海道旭川市に生まれる。女学生であった昭和10年代は、まだ大正デモクラシーを受け継ぐ自由な思想が残っており、綾子の学んだ女学校も民主的な明るい学校で、自治会活動も活発だった。しかし、満州事変がおこり、昭和11年には二・二六事件、さらに翌年の日支事変によって、日本は急速に軍国主義に傾斜していく。それとともに天皇が神格化され、天皇に生命を捧げることが名誉であるとする教育がなされていった。

昭和14年、綾子は16歳ながら代用教員として、歌志内の神威小学校に赴任した。この学校にもすみずみまで軍国主義教育が行き届いていたが、綾子もまた、それに疑いをもつことはなく、ひたすら国家が進める教育に励んだ。

しかし、敗戦の日がやってきた。あれほど大切にさせた修身の教科書に墨を塗りなさい、と子どもたちに命じるのである。自分の教えてきたことは、償うことのできない罪である、という自覚に苛まれた。

自らも関わった軍国主義教育に疑問を抱き、敗戦の翌年に退職したが、肺結核を発病。入院中、北大医学部を結核で休学中の前川正に再会し、文通を開始。熱心なクリスチャンであった前川から多大な影響を受け、結核の闘病中に洗礼を受ける。何とその二年後、前川が死去するが、悄然としていた綾子に、前川の生まれ変わりとも思える三浦光世が現れ、かけがえのない伴侶を得る。光世の勧めもあり、昭和38年、朝日新聞社による一千万円懸賞小説に応募したところ、綾子が書いた『氷点』が選ばれ、大ベストセラーとなった。以後、次々と発表される作品は、キリスト教信仰に深く根ざした、それまでに類を見ない新しい文学で、読む者に、生きる力と感動を与えるものとなった。自身を「病気のデパート」と表現するほど健康には恵まれなかったが、「私は神様にえこひいきされて感謝している」と言って周囲を驚かせた。世に送り出された作品群の売上は4千万部に達すると言われる。

今回は、前回に続き、クリスチャン作家として数々の名作を世に送り出し、夫の光世氏とともに、信仰者として多くの人々をキリストに導いた三浦綾子氏の生涯から学びます。

記

1. 日時:2016年11月11日(金) 10:30 AM より
2. 場所:ゴスペルホール(電話 026-295-6705)
3. 講師:尾崎富雄(ゴスペルホール代表)

入場無料。どなたでも参加できます。